

「授業スタンダード」を市内で共有し、 小小連携で「本物の活動」を目指す

高知県 香美市教育委員会、香美市立大宮小学校

高知県香美市は、2018年度から、高知県教育委員会より英語教育に係る指定事業を受け、同市立大宮小学校の実践を市内に広げる形で小学校英語の充実を図ってきた。授業展開の型を示した「授業スタンダード」を構築し、全校で指導案を共有。同校に加配された英語指導教員が全校を回って助言し、学級担任の英語指導力の向上を支えた。さらに、同校の公開授業研究会や他校との交流授業など、小小連携をしながら、子どもが自分事として英語を学ぶ「本物の活動」づくりを進めている。

プロフィール

高知県香美市

◎高知県の北東部、高知龍馬空港から車で約15分のところに位置する。市面積の約9割が森林で、物部川など、豊かな自然を有する。教育の基本理念を「郷土を愛し、未来を拓く人づくり」と定め、「学ぶ!」「つながる!」「未来を拓く!」の視点で教育振興に取り組む。

香美市立大宮小学校

◎学校教育目標は、「輝く大宮っ子! 笑顔・個性・命」。2021年1月、国内の公立小学校では初めて、国際バカロレア機構*から初等教育プログラム(PYP)の認定を取得。



人口 約2万5,500人 面積 537.86km²
市立学校数 小学校7校、中学校3校
児童生徒数 1,576人
教員数 175人

開校 1961(昭和36)年
校長 森田卓志先生
児童生徒数 152人 教員数 17人
学級数 10学級(うち特別支援学級3)

楽しいだけのゲーム活動から 自分事として捉える英語活動へ

高知県香美市教育委員会(以下、市教委)は、2016年度、「小中学校の9年間を通して、意欲的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」をテーマとして英語教育の研究に着手した。2015年度に市内の小学5・6年生対象の英語学習の意識調査を行ったところ、「英語の授業ではゲーム活動が楽しい」の肯定率が91%と高い一方で、「英語で自分のことや意見を発表することが楽しい」が64%、「英語の授業の内容を理解している」が67%という結果だった。学校教育班の田村香江指導主事は、当時の課題意識を次のように語る。

「その頃の英語活動は、ゲーム活動が中心で、自分がリンゴを好きでなくても「I like apples.」と言うなど、子どもはその表現の必要性を理解せず

に英語を使っていました。活動に興味を感じていなければ、学習内容は定着しませんし、コミュニケーション力も育まれません。子どもが自分事として英語を使いたくなる『本物の活動』を模索し始めました」

同時期に、同市立大宮小学校では、「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)と英語活動の連携を始めた。総合学習でみそ作りを学んだ子どもたちから、「日本の伝統食の素晴らしさを世界に発信したい」という声が上がったため、市内の高知工科大学の留学生との交流会を実施した。同校の英語教育推進教員を務める加藤かや先生は、こう振り返る。

「子どもは交流会に向けて、英語でどのように言えば自分たちの思いが伝わるのかを考え、当日は自作のみそクッキーについて、留学生に何とか伝えようと頑張っていました。そうした子どもの姿を目のあたりにして、自分



香美市教育委員会
教育振興課学校教育班
指導主事

田村香江

たむら・かえ

公立中学校英語教諭等を経て、2016年度から現職。



香美市立大宮小学校
英語教育推進教員

加藤かや

かとう・かや

同校に赴任して9年目。2018～2022年度、英語指導教員。

事として学ぶ重要性を痛感しました」

交流会を機に英語活動に力を入れ始めた同校は、市の英語教育の拠点校に指定された。同校が国際バカロレアの認定取得を目指すこともあり、市教委と同校は連携して研究を進めた。

「授業スタンダード」を土台に 教員の指導力を底上げ

その研究は、2018年度から3年間、

* スイスのジュネーブで設立された非営利団体で、3歳から19歳までの国際的な教育プログラムを開発・提供している。

同校が高知県教育委員会（以下、県教委）から指定を受けた英語教育推進事業等によって大きく進展。学級担任の英語指導力が飛躍的に向上し、同市の英語教育の土台を築いた。

担任の日々の実践を支えたのは、市で共通とした授業展開の型である「授業スタンダード」（図1）だ。全国の先進校の実践を参考に、文部科学省の視学官から助言を受けながら、田村指導主事と加藤先生が中心となり、基本的な授業の流れを作成し、担任の英語指導力の底上げを図った。

Small Talkは、自分のことを自由に話す活動とし、子どもが英語で表現する楽しさを感じ、英語学習への意欲を高めることを目的として、授業冒頭に設けた。

中間交流では、Activity 1 で子どもが言いたくても表現できなかったことを取り上げ、どうすれば英語で言えるかをクラス全員で考える。

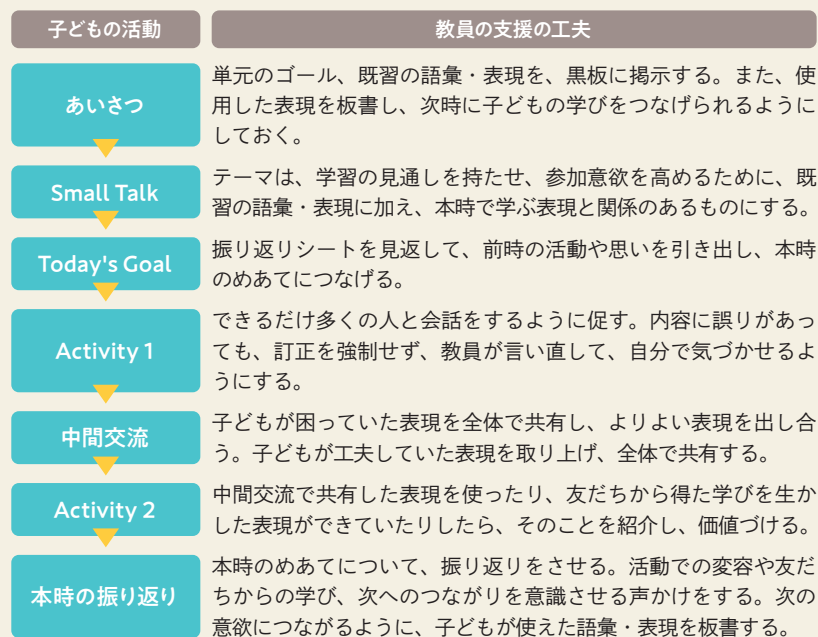
「教員が新しい英単語や表現を教えるのではなく、子どもが既知の英単語や表現を使って、別の言い回しを考えます。表現力を磨くとともに、自分で工夫して伝えるという姿勢にもつながります」（田村指導主事）

例えば、「お父さんにもらったからお気に入りなの」と言いたかったが、「お父さんにもらった」の表現が分からなかったことを中間交流で取り上げた。すると、「もらったはtake?」「give me とか」と子どもたちが次々に発言。ある子どもの「father's present は?」の案に皆、納得したという。そうした中間交流での学びをすぐに活用できるよう、Activity 2 を設けた。

授業の最後の振り返りでは、本時のめあてを踏まえて、子どもが自身の振り返りシートに記入。次時への目標を持ち、学習意欲を高められるようにした。

この「授業スタンダード」を基に各

図1 香美市の「授業スタンダード」



※香美市教育委員会、大宮小学校の提供資料を基に編集部で作成。

学校は授業づくりを行い、書式を統一した単元計画や指導略案を学校間ネットワークなどで共有することで、市全体で授業実践を蓄積していった。

小小連携で、指導案だけでなく、実践を見て、学ぶ

同事業の加配として**英語指導教員**となった加藤先生が行った巡回指導も、各学校の担任の実践を支えた。加藤先生は、大宮小学校以外の市内6校を、それぞれ週1回のペースで訪問。授業を参観し、指導・助言を行った。

「まず着目したのは、子どもが本気で取り組みたいと思う単元のゴールになっているかです。加えて、どの発言を取り上げたから、子どもの学びが深まり、活動が活発になったのかといった点を見取り、伝えました。先生方がすぐ授業に生かせるような助言を心がけました」（加藤先生）

学校単位の研究では、各学校が英語教育をテーマに年2回の校内研修

を実施。子ども主体の活動だったか、子どもが授業のめあてを意識できるように板書や声かけを工夫できていたかななどを、各学校とも全教員で検討した。そして、年度末には、田村指導主事と加藤先生が各学校を訪問して授業を参観し、管理職や外国語担当教員と成果や課題を共有。各学校が授業改善のPDCAサイクルを回せるようにした。

拠点校の大宮小学校が行う**公開授業研究会**では、各学校の外国語担当教員の参加を必須とするだけでなく、1校から複数の教員の参加を呼びかけた。参加者には、指導案を事前に配布。それを各自で読み込んでもらった上で授業を見ることで、どんな実践がよいのかを子どもの姿を通じて感じられるようにし、その指導案を自校でも活用できるようにした。

加えて、事後の研究協議では、参加者全員で改善点を議論した。

「同じ指導案、同じ授業を基に、そこから何を改善できるか、各学校の実

実践やアイデアを出し合うようにしました。よい実践例を小学校間で広める、**小小連携**の『横』の視点を大切にしました」(田村指導主事)

2020年度からは、小学校に新たに配置された**英語専科教員**との連携も図っている。英語専科教員は児童数が最も多い小学校に所属し、さらに他校の英語の授業も担当するため、加藤先生が、英語専科教員と香美市の英語教育の方針を共有。子どもの特性を踏まえて指導ができる担任と、

専門性の高い指導ができる専科教員、双方の強みの融合を目指している。

また、2020年度で加藤先生による市内小学校への巡回指導が終了したことを受け、クラウド上で単元計画案や教材、ALTが製作した動画などの共有も進めている。それによって、大宮小学校が作成した単元計画を参考に他校が授業を行うことで、新たな気づき生まれ、大宮小学校も浮かび上がった課題から授業改善を行うといった連携が可能となっている。

子どもが目的意識を持てる「本物の活動」を盛り込む

それらの取り組みにより、各学校の英語教育に関する理解が深まり、子どもの自分事となる単元のゴールを十分に検討する授業づくりが定着した。大宮小学校では、6年生のやりたいことを尋ねる単元で、教科書の題材はスポーツだったが、クラス全員が意欲的に取り組める題材を担当と加藤先生で議論。その結果、10月

授業レポート

6年生 外国語科

みんなで修学旅行を楽しむために、したいことを伝え合おう

本時のめあて：行きたいと思ってもらう、行きたいと思うために、行きたいところをアピールしよう

1 あいさつ、Small Talk



Small Talk のテーマは、「朝食で作りたいもの」。担任の先生とALTがデモンストレーションをした後、子どもは相手を変えながら英語で質問し合った。

2 めあての確認、Activity 1



本時のめあてを確認後、修学旅行で行きたい場所をアピールする活動を実施。「What do you want to do?」に対し、行きたい場所と理由を英語で説明した。

3 中間交流、Activity 2



いったん全員で集まり、「Aさんは前の授業にはなかった説明を加えていましたね」など、子どものよかった表現を取り上げた。それらを踏まえ、活動を再開。

4 Activity 3



本時の活動を通じて、自分が新たに行きたくなった場所を端末に入力。どの場所が多いか予想した上で、再び自分が入力した場所と理由を伝え合った。

5 全体共有



先生がアンケートの集計結果を発表。上位の場所を挙げた4人の子どもが、誰のどのような発言で行きたくなったのかを発表した。

6 単元の振り返り



単元を通じてできるようになったことなどを振り返りシートに記入。3人が発表した。最後にALTが「Please tell me after the school trip.」と伝えた。

に行う修学旅行に題材を変更し、訪問先の中から自分が楽しみにしている場所を選び、理由とともに伝え合う活動にした（授業レポート参照）。

「修学旅行は、子どもが5年生の時に計画を立てて、校長に要望し、いくつかの案が取り入れられました。どの子にとっても思い入れのある題材とあって、いつも以上に積極的に活動していました」（加藤先生）

授業で担任は、「何をアピールすればよいか？」「なぜ、そこに行きたいのか質問しよう」などと声をかけ、子どもが常にゴールを意識できるようにした。前の単元では、ゴールに向かって子ども自身が自己調整できるように促すための声かけが十分でなく、子どもの目的意識が希薄だっ

たという反省があった。そこで、本単元では、子どもに意図的に声をかけていったという。

単元のゴールに応じて、**小小連携による交流授業**も実施している。5年生の「夢の時間割を伝え合う」の単元では、同年代の他校生と伝え合う活動を単元の最後に設定すれば、学習の目的意識が高まると考え、大宮小学校が同市立楠目小学校に交流授業を提案し、実現した（下写真）。

「大切なのは、子どもにとって『本物の活動』となることで、相手は外国人に限らず、日本人でもよいのです。市内で単元計画や指導案を共有し、同じ単元の授業を同時期に行うため、小小連携がしやすくなりました」（加藤先生）

同交流授業では、事前にオンライン会議ツールで交流を2回行い、子どもの期待を膨らませた。すると、当日の活動前に、交流授業で説明する予定の自作の時間割を、自主的に見直す子どももいたという。

小中連携の視点も加え、子どもの学びと育ちを支える

現在は、県教委「英語教育改善プラン」の指定を受け、小小連携だけでなく、中学校区内の**小中連携**の強化も図っている（図2）。香北中学校区（大宮小学校・香北中学校）を拠点とし、小・中9年間の**CAN-DO**リストや学習評価などを研究。それらの成果を市内全校に発信している。

市内全校の外国語担当教員が参加する「**学びをつなぐ学校づくり研究会 外国語教育研究会**」でも、各中学校区の取り組みを共有。加えて、2022年度は、2023年2月の公開授業研究会に向けて、大宮小学校の指導案等を基にした研究会を5回実施する。研究会のメンバー全員で指導案を共有し、それを基に実践した授業と、実践を踏まえた改善を重ね、小・中全体での英語指導力のさらなる向上を目指す。

「昨年度、中学校での指導に生かそうと、市内の小学6年生全員に英語4技能検定を受検させました。そのスコアが高かった小学校の指導を分析したところ、学級担任が子どもに丁寧ていねいに寄り添い、題材への関心を高めることで、子どもが自分事として学びに取り組めるようにしていたのです。私たちが重視してきた『本物の活動』が重要だと改めて実感しました。どのような施策でもその点をぶれずに先生方に伝えて、これからも子どもたちの英語力を育てていきたいと思います」（田村指導主事）



写真 大宮小学校と楠目小学校の交流授業の様子。最初は緊張していた子どもたちだが、次第に質問が活発化し、給食やクラブ活動の違いを説明し合う姿もあった。最後には「またやりたい!」という声が上がった。

Web VIEWnext ONLINE では交流授業を動画で公開。右記の2次元コードからもアクセスできます。▶▶▶▶▶

